

Title	達成動機研究における方法論の検討と課題
Author(s)	平川, 淳子; 尾崎, 仁美
Citation	大阪大学教育学年報. 5 P.85-P.98
Issue Date	2000-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/4912
DOI	10.18910/4912
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

達成動機研究における方法論の検討と課題

平川 淳子 尾崎 仁美

【要旨】

原因帰属過程を中心におき、様々な研究分野に応用されているWeinerの達成動機づけ理論であるが、その実証研究においては多くの方法論的問題点を指摘できる。まず、個人の帰属様式の違いを検討するだけでなく、どのような領域における達成目標であるかによって帰属因が異なっていることも考慮して、例えば「学習」「スポーツ」といった領域ごとの特徴も検討しなければならない。また、被調査者に達成の意志がある重要な領域かどうか大きな要因となる可能性があるが、それには、調査者側があらかじめ領域を設定するのではなく、被調査者側の自由記述によって得られた領域について重要度を評定してもらうという方法が有効である。さらに、領域を客観的な分類に基づいて扱うだけでは不十分であり、目標研究において用いられているように、達成目標への属性評定を求めることにより個人にとってその領域がどのような意味づけを持ったものかを把握するという、主観的分類による比較検討も行われる必要性があることも導き出された。

以上のような研究方法は、これまでの達成動機研究の流れを統合した方法であり、それによって個性記述的にも法則定立的にも達成のプロセスを扱えるであろう。

1. はじめに

近年、子供の学習意欲をどのように育てるか、という問題意識の下、学校における学業達成に関して心理学の様々な研究による知見が用いられている。その1つに達成動機づけ研究があるが、その多くがWeiner et al.(1971)による達成動機づけ理論を基にしている。Weiner理論は、特にその帰属理論(attribution theory)的アプローチを中心として、達成動機研究のみならず、多様な研究領域に影響を与え、また応用されているが、Weiner理論に基づいたそれらの研究を概観してみると、多くの問題が見受けられる。理論としての精度の問題、諸概念の定義の不一致などはもちろんのこと、理論に基づいた研究を行う際の方法論上の問題も多い。

そこで本稿では、これまでの研究をレビューしながらその方法論的問題点を検討する。その際、学業達成に限定せず、様々な領域の目標達成を視野に入れられるよう留意する。そして、心理学における他領域の研究方法を参考に、Weiner理論に基づく達成動機研究を行う際の新たな視点を提案することを目的とする。その際、筆者らが行った研究結果も示しながら考察したい。

2. 従来の達成動機研究の概観

(1) 達成動機の定義と研究の流れ

達成動機(achievement motivation)⁽¹⁾とは、「その文化において優れた目標であるとされる事柄に対し、卓越した水準でそれを成し遂げようとする意欲」(宮本,1979)と定義されている。しかし、実際にはより一般的で広範な意味を持っており、速水(1995)の指摘に見られるように、反社会的目標以外の全ての目標に適用される「多様な目標志向活動の動機づけの総称」として用いられている。つまり、宮本(1979)にある「優れた目標」「卓越した水準」といった大袈裟な意味あいは薄れ、何らかの目標を目指していれば、それは全て達成動機を持った状態として記述されているのが現状であり、ここでもその意味での達成動機を扱うことにする。

動機づけの1つとしての達成(achievement)は、1930年代にMurrayらの社会的要求リストに達成の項が設けられたのが最初である(奈須,1995)。その後、達成動機の測定法の開発にともなって、1950年代から盛んに研究が行われるようになった。それ以来、達成動機に関しては様々な理論的立場から数多くの研究が行われており、奈須(1995)はそれらを、特定の動機の存在の有無と水準によって達成動機が決定されるとする「動機理論志向」、刺激に対する認知的処理に依存してもたらされる期待や価値(感情)の水準によるという「期待—価値理論志向」、達成者が目標の特質と機能に基づいて達成動機のあり方を決定するという「目標理論志向」の3つに大別している⁽²⁾。

(2) Weinerの達成動機づけ理論とその研究

現在多くの研究がなされ、達成動機研究の主流となっている感のあるWeinerの達成動機づけ理論(Weiner et al.,1971;Weiner,1979)は、このうちの期待—価値理論志向に属し(奈須,1995)、認知的処理として原因帰属(causal attribution)過程を中心においたものである。Weiner理論では、まず、先行経験の成功・失敗が能力や努力などに帰属される。それらの帰属因は原因次元上に布置されており、次元上の位置付けが感情や期待度を介して次回の達成行動を決定するとされる(Figure1)。

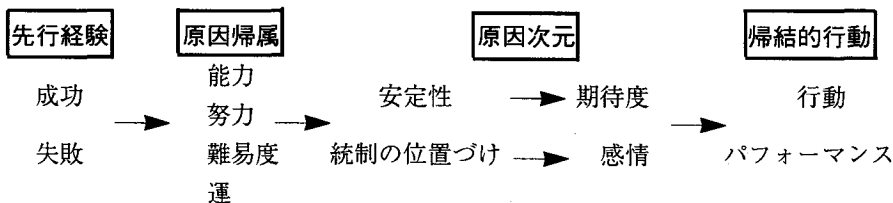


Figure 1 : Weiner理論の図式(稲木,1978)

そもそもWeiner理論は帰属過程そのものに重点がおかれているのではなく、次の達成行動を説明し予測するためのモデルである(広瀬ら,1982;稲木,1978など)のだが、この理論の特長は、帰属因と原因次元を設定し、それが達成行動に与える影響を明確に定式化したところにある。したがって、後続の研究も帰属過程とそれが感情に及ぼす影響に集中しており、帰結的行動まで含めて検討したものは比較的少ない。さらに、帰属過程に関する研究結果がまちまちで、理論が十分に支持されていないため、次の行動の予測にまで手がまわらない、という理由もあるかと思われる。そこで、本稿でも、帰属等の認知的処理過程をどう捉えるかに焦点をあてて考察し、認知処理結果としての達成行動レベルまでは言及しない。また、忘れてはならないのは、努力などの帰属因は、原因はどこにあると認知するかという認知レベルでの要因として用いられるのであって、客観的事実がどうであるかは問わないということである。例えば、周囲から見れば失敗の原因は明らかに努力不足のせいであったとしても、本人が「運が悪かったせいだ」と認知したならば、そちらを重視するのである。この点で、Weiner理論は個人がどう意味づけるかに留意した理論と言え、この基本的姿勢は達成動機を考える上で重要かつ唆深い。

理論の核となる帰属因は、当初は「能力(ability)」「努力(effort)」「課題の難易度(task difficulty)」「運(luck)」の4つであり、それぞれが「安定性(stability)」「統制の位置づけ(locus of control)」次元上に配置されていたが(Weiner et al.,1971)、後に8つ⁽³⁾に改正されている(Weiner,1979)。Elig & Frieze(1979)を始めとして帰属因が十分でないという指摘は多いものの、領域によって帰属因が異なることは明らかであり、それはWeiner自身によっても指摘されている(Weiner,1983)。この点については、次で詳しく検討する。

3. 従来の研究における問題点の検討

(1) 領域と達成動機を考慮する必要性

そもそもWeiner理論は学業における達成場面を想定しているが、実際にはそれ以外の様々な領域においても用いられており、例えば学業以外の達成領域としては、ピアノをうまくひけるかどうか(Riemer,1975)、投稿論文の受理・拒否(Crittenden & Wiley,1980)、スポーツでのチームの勝利・敗北(Lau & Russel,1980)などが扱われている。達成領域ではない領域についての研究も見られ、デートの拒否(Folkes,1982)、孤独感(中村,1986)のような親和(affiliative)領域、選挙の当落(Kingdon,1967)のような勢力(power)領域を扱ったものなどがある。学業に関する達成領域でも、便宜的実験課題(アナグラム等)における帰属様式と、現実生活における達成課題(学校の試験等)の帰属様式が異なっており(北山ら,1995)、さらに同じ現実生活における学業達成課題でも、教科によって帰属の仕方が異なるという指摘も多くなされている(速水ら,1979;相川ら,1985;杉浦,1996など)。

よって、1つの方法としては、様々な領域をリストアップし、それに対応する帰属様式と、それが次の達成に与える影響のプロセスを検討してゆくことが考えられる。

また、Weiner理論では次の達成動機への影響に焦点があてられているが、本来持ってい

た達成動機の高低が与える影響も組み込まれており、Weiner et al.(1971)は、達成動機の高低によって帰属様式が異なることを指摘している。Weiner理論に基づいた実証研究においても、達成動機を独立変数として考慮したものは多く、その測定方法としては、項目によるもの(Weiner & Sierad,1975;相川ら,1985)、TAT(thematic apperception test)を用いたもの(広瀬ら,1982)などがある⁽⁴⁾。このように、領域ごとに達成動機のプロセスを扱っていただくだけでは不十分であり、被調査者にとって達成の意志がある重要な領域かどうか、という要因にも注目する必要がある。これは奈須(1995)の分類に基づけば、動機自体の程度を考慮するという点で「動機理論志向」の流れを汲む視点であると言えよう。さらに考慮すべきは、達成動機は本来性格特性・行動特性として捉えられがちであり、実際何事にも達成の意志を強く持つものもいれば、反対に何事にも意欲的でないものもいよう。しかし、同じ個人であっても、領域が異なれば達成動機が異なること(例えば、部活動には非常に熱心だが、学業への達成意欲は低いなど)も実際にありうる。性格特性としての達成動機だけでなく、学習時間の量を測定する(奈須,1990)などの、領域固有の、もしくは一時的な「達成の意志」とでも呼べるものを測るという姿勢も必要であろう。

そこで平川(1999a)は、大学生223名を対象に、国語・数学・英語など教科ごとに領域を定め、帰属様式の違いを検討しようと試みた。また、この際、上記の領域固有な達成の意志の高低を知るため、それぞれの領域で良い結果を出すことの自分にとっての重要度の評定を求めた。達成の意志の指標として、学習時間の量(奈須,1990)などではなく重要度評定を用いたのは、テストといったような短期間の、1回ごとの達成についてではなく、現在と過去を含めた総括的な達成の意志と帰属を求めたためである。しかしながら、思うような分析結果は得られず、教科ごとの帰属様式は非常に繁雑で、有意味な解釈をすることができなかった。また、重要度の違いによる帰属様式の違いも見られなかった。つまり、重要度評定が達成の意志の指標となっていなかったのである。これには調査者側が設定した領域について重要度を評定するという点の、方法論上の問題が考えられる。

(2)あらかじめ設定された領域における重要度評定の問題点

評定による重要度評定がそれほど有効ではなかったことは、他の領域の研究においても指摘されている。例えば自己の研究では、ある領域における自己概念の重要度をとらえるため、調査者が設定した領域について個人がどの程度重視しているかを評定させるという、上記の平川(1999a)と同じ方法が用いられてきた。しかし、Marsh(1986)やHoge & McCarthy(1984)では、重みづけの算出方法をさまざまに工夫しても、個人にとっての重要度をうまくとらえることができなかったことが報告されている。また、将来展望をテーマとして個人にとっての重要度を捉えようと試みた尾崎(1999)においても、評定法では個人にとっての重要性を十分にとらえることができなかった。つまり、「～は、あなたにとって重要ですか？」と尋ねられて“重要である”と答えたものには、尋ねられれば何となく“重要である”と答えるが、個人のなかでそれほど重要な意味をもっているわけではない、という程度のものも含まれる可能性が大きいのである。

この点を克服するために有効な方法が、自由記述であろう。自己概念研究においても、あ

る項目を提示し自分自身にどの程度あてはまるかを評定する方法と比較して、“20答法 (TST:twenty sentences test)” (Kuhn & McPartland,1954)や“WAY:who are you test” (Bugental & Zelen,1950)などの方法では、個人にとって価値ある重要な側面がとらえられることが指摘されている(McGuire & Padawer-Singer,1976;McGuire & McGuire,1980)。つまり、被調査者に自由に表出させることにより得られた領域は、個人にとって比較的意識度・関心度の高い領域なのである。

このように、調査者側が領域を指定するのではなく、被調査者の自由な記述を求めることによって、個人にとって真に重要な領域を扱うことができる。重要度評定によって達成の意志を捉える試みも、このような自由記述によって得られた領域に対して行われてこそ有効であったと考えられる。

また、平川(1999a)において、教科間の比較で有意な結果を得られなかった原因は、前述したように、教科ごとの帰属様式の違いが関係しているとも考えられる。しかしながら、先ほど述べたように、領域をこちらが設定しても、被験者にとって達成を志向している重要な領域を扱うことができず、重要性の評定にも意味がない、という可能性があることがわかった。帰属パターンができるほど自己に関わりのない、普段特に意識していないような細かい領域にわけて聞いたからこそ、本人にとっての重要性というものがますます不明確になり、結果が出なかったものとも考えられる。そもそも、例えば教科といった細かい領域に関する帰属様式を知る前に、学業領域というより包括的な領域での帰属様式を検討することが先決であろう。さらに、細かい領域を想定して領域ごとの理論の精緻化をはかっても、領域は無数に存在するであろうし、それに伴って領域固有の認知的処理のプロセスも無数に増えてゆき、もともとの理論の明快さを失わせるだけという感が否めない。

(3)領域設定を工夫した研究

そこで、平川(2000)では、学業・スポーツなど大枠に領域を設定し、その中で被験者の自由記述によって細かい領域を設定してもらったほうがよいであろうと考え、大学生220名を対象とした調査を行った。学業領域とスポーツ領域は、努力の対象としてあげられることが最も多い(平川,1999b)ため、その2領域について、重要度と失敗の原因帰属を求めた。領域は、「あなたは、今までに学業で失敗したことがありますか。あるいは苦手な科目がありますか。高校のときにテストで悪い点数をとった、大学に入ってからレポートで悪い点数をとった、単位を落とした、数学がいつも苦手だった、など、いつのことでもどんなことでもかまいません」と教示し、自由記述で細かい領域を設定してもらおうという形で被調査者にとって重要で達成の意志が強い領域を捉えることを試み、また平川(1999a)と同様にそれを達成することの重要度の評定も求めた。帰属の評定は、100点満点で数直線上に○をつけるという方法を用い、帰属因は、「もともと能力がなかったから(能力帰属)」「努力しなかったから(内的努力帰属)」「何かのせいで努力できなかったから(外的努力帰属)」の3つを用意した⁽⁵⁾。

重要度とlocus of control(LOC)尺度(鎌原ら,1982)の得点を独立変数とする重回帰分析の結果、学業・スポーツ両領域において重要度評定が意味をなし、重要と思っているほど能力帰属しないという帰属様式の違いが見られた(Table1;Table2)。

Table1:学業領域における重要度とLOCの重回帰分析結果

従属変数	独立変数			重相関係数
		重要度	LOC	
能力帰属	β	-.15*	-.13	.20**
内的努力帰属	β	-.13	-.06	.15
外的努力帰属	β	.09	-.15*	.17*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

β は標準偏回帰係数

Table2:スポーツ領域における重要度とLOCの重回帰分析結果

従属変数	独立変数			重相関係数
		重要度	LOC	
能力帰属	β	-.21**	-.10	.23**
内的努力帰属	β	-.08	-.00	.08
外的努力帰属	β	.14	-.02	.14

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

β は標準偏回帰係数

また領域そのものによる違いも見られ、学業では内的努力帰属が能力帰属よりも高いが、スポーツでは有意差はなかったものの点数としてはむしろ能力帰属のほうが高め、という異なる帰属様式がとられていることも明らかになった(Figure2;Table3)。重要度を加味しても、この傾向は変わらなかった(Figure3;Table4)。

以上のように、被調査者の自由記述によって領域を設定することで、達成の意志としての重要度評定も意味をなし、その違いによる帰属様式の比較が可能となり、また、領域ごとの質の比較もでき、領域固有の帰属様式の存在が確かめられた。

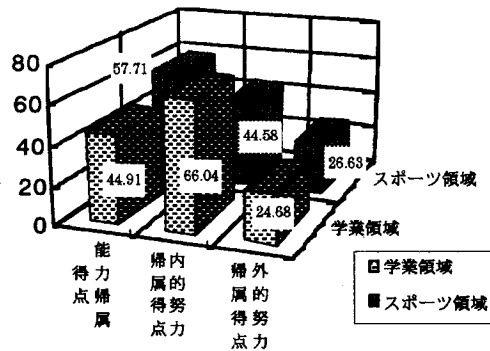


Figure2:領域ごとの帰属得点

Table3:領域ごとの帰属得点比較

	能力帰属	内的努力帰属	外的努力帰属	F 値	多重比較結果 (LSD)
学業領域	44.91 (28.08)	66.04 (29.98)	24.68 (27.89)	98.06*** (d.f.=2,424)	外的<能力<内的
スポーツ領域	57.71 (28.46)	44.58 (30.82)	26.63 (31.57)	49.49*** (d.f.=2,414)	外的<内的,能力

*p<.05 **p<.01 ***p<.001
カッコ内は標準偏差

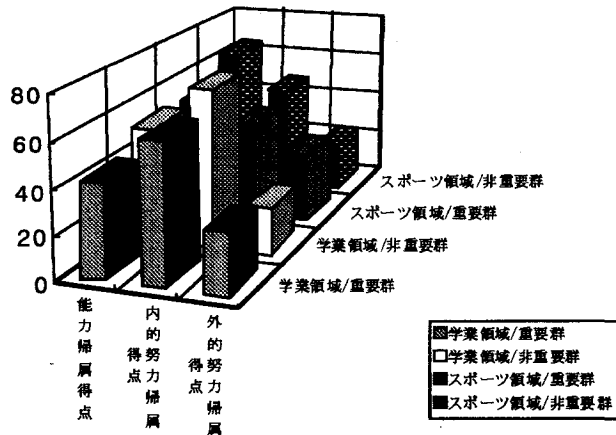


Figure3:領域と重要度ごとの帰属得点

Table4:領域と重要度ごとの帰属得点比較

	能力帰属	内的努力帰属	外的努力帰属	F 値	多重比較結果 (LSD)
学業・重要 (N=155)	42.29 (26.99)	62.72 (30.56)	26.64 (28.80)	54.22*** (d.f.=2,296)	外的<内的
学業・非重要 (N=64)	52.19 (30.47)	71.72 (29.73)	21.59 (26.16)	49.50*** (d.f.=2,124)	—
スポーツ・重要 (N=117)	52.07 (28.97)	42.28 (30.66)	30.90 (32.26)	11.84*** (d.f.=2,220)	—
スポーツ・非重要 (N=99)	63.88 (27.23)	47.11 (31.09)	22.19 (30.96)	45.52*** (d.f.=2,190)	外的<能力

*p<.05 **p<.01 ***p<.001
カッコ内は標準偏差

平川(2000)では、達成目標の属する領域が個人にとってどのようなものとして捉えられているかを重要度以外測定せず、「学業」「スポーツ」といった客観的な分類によるのみ扱った。しかし、そのような形で領域ごとの質の比較を行っても、それだけで領域の影響の考慮が十分と言えるのだろうか。同じ領域の達成目標であっても、個人にとっての捉えられ方、意味づけが異なることも考えられる。そのような点を視野に入れ、個人差に留意したより豊

かな意味の達成目標を扱う必要性はどのようなところにあるのだろうか。また、それはどのような方法を用いればいいのだろうか。

ここで、目標研究におけるアプローチが参考になる。

4. 目標研究におけるアプローチ

(1) 目標研究における目標把握

1980年代以降、盛んに行われるようになった目標研究では、「目標とされる内容は個人によって異なる」という前提のもと、自由記述を中心としたアプローチがとられている。大橋・篠崎(1995)は、従来の動機づけ研究が達成動機づけに集中していたのに対し、最近の目標研究は、動機づけの対象を達成動機づけに限定せず、あらゆるゴールを研究対象とするようになってきたことを指摘しているが、それは、上記のような方法をとることによって、学業やスポーツのみならず、個人が達成しようとしているあらゆる目標を研究対象とすることが可能となったからであると考えられる。目標研究のうち、特に代表的なものをとりあげ、具体的な方法をまとめたものがTable5である。

Table5: 代表的な目標研究における目標把握の方法

概念	personal project	personal striving	life task
定義	時間の流れの中で相互に関連した一連の行動であり、個人が予見した出来事を維持・達成しようとするもの(Little, 1983)	様々な状況において個人が達成したいと思っている典型的なタイプの目標(Emmons, 1989)	人生の特定の時期や生活状況において個人が取り組む課題(Cantor & Langston, 1989)
目標の抽出	現在関与したり考えたりしている personal project を 10 分間に思いつく限り挙げてもらう ⇒その中から 10 個を選択	日常においてしようとしている典型的で特徴的な事柄を思いつく限り挙げてもらう ⇒その中から最も自分自身をよく表していると感じられる 15 個を選択	現在取り組んでいる課題をリストアップしてもらう ⇒被調査者自身によって 6 カテゴリー(よい成績をあげる、将来の目標を立てる、時間を管理する、家族から自立する、アイデンティティを形成する、友人をつくる) ^① に分類
目標の属性 判定	10 個の personal project に対して、重要性・楽しさ・困難さなど 17 の次元について 11 段階で判定	15 個の personal striving に対して、価値・関与・重要性など 18 の次元について 5 段階判定	6 カテゴリーに対し、重要性・楽しさ・困難さなど 11 の次元について 11 段階で判定 ^②
目標の構造	どのようにその project を達成するのか、なぜその project に関与するのかを記述し、project 相互の影響(促進か妨害か)を判定	一つの personal striving を達成することが他の personal striving の助けとなるか害になるかを判定し、15×15 のマトリックスを作成	life task 相互間の促進・妨害の関係を検討

^①この 6 つは大学生を対象とした life task のカテゴリーである。その後、女子大学生のみを対象とした研究(Cantor et al., 1991; 1992)では、カテゴリー内容に若干の修正を加え、7 つのカテゴリーが用いられている。

^②Cantor et al. (1991)では、次元が若干改訂され、15 次元について 9 件法で判定するよう求めている。

目標の定義や属性評定においてとりあげられた次元は研究者によって若干異なるが、個人が現在達成しようとしている目標を自由に表出させた後、各目標に対していくつかの次元で評定を求めたり、目標相互の関係を検討する、という手続きはどの研究にも共通している⁽⁶⁾。目標の内容は個人にゆだねつつ、その属性評定を求めるこれらの方法にはどういった意味があるのだろうか。

(2)目標に対する属性評定の意義

第一は、Emmons(1986;1989)も指摘しているように、目標が「個性記述的(ideographic)」にも「法則定立的(nomothetic)」にも扱われうることである。個人が抱く目標の内容や目標に対する意味づけ、目標間の相互関係や階層構造をとらえることにより個人の目標体系を理解することが可能となる。Emmons(1989)や角野(1993)が指摘する臨床場面への応用可能性は、目標のもつ個性記述的な側面を活かす試みの一つといえよう。一方、目標の属性評定を個人間で比較することも可能であり、目標の達成に伴うストレスや困難度がうつや不安と相関が高いこと(Lecci et al.,1994)、目標の価値や過去の達成度はポジティブな感情と、成功可能性の低さや目標間の葛藤はネガティブな感情とそれぞれ関連し、目標の重要性や目標間の葛藤の低さなどは人生に対する満足度と関連すること(Emmons,1986)などが報告されている。このように、個人独自の目標の内容を扱いつつ(ideographic)、各目標について評定させた次元(重要性や実現可能性、困難さなど)に関しては、個人間で比較することも可能である(nomothetic)。

第二は、目標の内容が何であるかというだけでなく、その目標が個人にとってどういう意味を持つのか、という目標に対する個人の意味づけが考慮できることである。たとえば、同じように「期末試験で良い点をとる」という目標を挙げていたとしても、それだけでは、その目標が個人にとってどういう意味づけをもつかが明らかではない。先述したように、「学業」や「スポーツ」などの領域があらかじめ設定されている場合よりは、自由に表出させた方が個人にとって重要な目標が得られるであろう。だが、単に自由に表出させるのみでは、重要度以外の、個人にとっての目標の意味づけまでは考慮することができない(尾崎,1999)。日常生活においてほとんど目標を意識しない者にとっては、目標を書くよう指示されたため無理矢理何らかの記述を表出しただけなのかもしれない。個人が自ら表出した目標であるとはいえ、その目標の実現にそれほど意義を感じていない者もいるであろう。その目標が個人にとって価値ある目標だと認識しているかどうか、頑張れば実現できると思っているかどうか等によって、達成に向けての行動や、達成できた(できなかった)場合に個人に及ぼす影響度は全く異なったものとなろう。目標研究では、「楽しさ」「困難さ」といった多様な次元を用いた属性評定によって、個人が目標をどのようなものとして認知しているのかを扱うことに成功している。

以上のように、目標研究で取り上げられているアプローチを取り入れることによって、個人独自の達成目標の質を扱いながらも、個人がその達成目標をどのように認知しているか、ということまでを捉えることが可能となる。

5. まとめと今後の展望

従来のWeiner理論に基づいた達成動機研究においては、個人内の認知的処理の過程(Weiner理論で言えば帰属様式)による違いを扱ってきた。これは、奈須(1995)の達成動機研究の分類における期待—価値理論志向に属するものであると言える。しかしながら、本稿では、達成目標がどのようなものとして認知されているかという目標の属性による違いを検討しなければならないということも導き出された。これは、目標の意味づけ自体を考慮するという点で、目標理論志向の流れに属するものであると言える。目標の属性による違いを検討する方法としては、目標研究におけるアプローチが参考になるが、そこでは、客観的な内容領域による違いよりはむしろ、目標に対する個人の意味づけの側面が重視されている⁽⁷⁾。これは、個人にとっての重要性や意味を捉える試みであり、原因帰属において客観性よりも主観性を重視するというWeiner理論の姿勢にも一致するものと言えよう。しかし、パーソナリティ研究においても指摘されているように、個人による状況の主観的解釈のみではなく、状況の客観的性質も両方考慮すべきである(Krahé,1992)。達成動機研究に立ち返って考えると、目標の属性評定とあわせて、例えば「学業」「スポーツ」といった客観的分類に基づいた領域の違いも検討されるべきである。実際、平川(1999c)の結果は、領域ごとの比較が意味をなすことを示している。これから研究を積み重ねていくことによって、客観的分類を考慮するほうが有効なのか、それとも属性評定のみで十分なのか、ということは明らかにされていくであろうが、現時点ではどちらも視野に入れた研究を行っていくことが必要であろう。つまり、「個人内の認知的処理過程」「個人が認知した目標の属性」「客観的分類による領域」の3点を考慮しなければならないのである。このような方法を用いることは、学業領域のみならず、様々な領域に関する達成動機研究に貢献できるであろうし、またそれら領域間の比較検討もできるという点でも有効である。

また、動機理論志向の流れを汲むものであろう方法論として、個人が達成を志向している重要な領域を扱うために、被調査者の自由記述によって領域を指定してもらい、その上で達成の意志などを評定させるという方式も積極的に用いられるべきである。

結局は、これまでの達成動機研究の3つの領域全てを統合した形の研究が必要とされているのであり、その方法は目標研究を始めとした他の研究領域に多く学ぶことができるのである。今後、この知見に基づいた研究が積み重ねられ、達成動機研究の方法論に関する一層の検討が望まれる。

<注>

- (1) 達成動機と達成要求(あるいは達成欲求 achievement need/need for achievement)の違いは、本来は前者がMurrayの理論を背景とする後者を含む、より広範な概念であるという点にあるようだが、心理学辞典(1999,有斐閣)でも「達成動機 achievement motivation;achievement need」と記載されているように、現在では特に区別することなく、同義として用いられているようである。
- (2) 動機理論志向にはMcClellandの達成動機・テスト不安・内発的動機づけ・自尊心の維持と高揚を扱う理論、期待一価値理論志向には学習性無力感・自己効力感を扱う理論、目標理論志向にはNichollsの自我関与課題と課題関与課題や、Dweckの遂行目標と学習目標の理論等が含まれる(奈須,1995)。
- (3) 改正後の帰属因は、「能力(ability)」「普段の努力(typical effort)」「直前の努力(immediate effort)」「課題の難易度(task difficulty)」「運(luck)」「雰囲気(mood)」「教師の偏見(teacher bias)」「一時的な他者からの援助(unusual help from others)」であり、原因次元も「原因の位置(locus of causality)」「安定性(stability)」「統制可能性(controllability)」に改正されている(Weiner,1979)。そして安定性は期待度の変化に、原因の位置づけはself-esteemに関連した感情に、そして統制可能性次元は他者の評価などに影響するとされている(Weiner,1979;Weiner,1983)。
- (4) これはWeiner理論に基づいた実証研究における測度の数例にすぎないが、達成動機の測定法としては様々なものが開発され用いられている。大きく投影法と質問紙法に分けられ、前者としてはTAT等の図版による空想物語法の他に、言語刺激による空想物語・言語反応によらないもの、また後者としては達成動機自体の測度・達成動機と失敗回避動機の合成された達成動機の測度・学業達成動機の測度等がある(宮本,1979)。
- (5) 内的努力帰属とは、努力帰属の形をとってはいるが、Weiner理論で設定されている次元からははずれる意味あいを含んだ努力帰属であり、このような努力の存在はこれまでの研究結果で示唆されている(平川,1999a;平川,1999b)ため、探索的に導入した帰属因である。また、帰属因をこの3つに絞ったのは、他の帰属因よりも自己へのインパクトが最も大きく、また学業達成場面においては能力と努力が最も一般的で顕著な帰属因である(Weiner,1979;北山ら,1995)ためである。
- (6) EmmonsやLittleは、自由記述に対して直接属性評定を求めるが、Cantorは自由記述のカテゴリーに対して評定させる点で若干違いがみられる。
- (7) 目標研究においても、研究目的によっては客観的分類に基づいた領域別の分析も行われている(Little et al.,1992;Emmons,1991など)。

<引用文献>

- 相川充・三島勝正・松本卓三・1985 「原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響-Weinerの達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討」 『教育心理学研究』,33,195-204
- Bugental,J.F.T., & Zelen,S.L. 1950 “Investigations into the ‘self-concept’ I: The W-A-Y technique.” *Journal of Personality*,18,483-498.
- Cantor,N.,&Langston,C.A. 1989 “Ups and downs of life tasks in a life transition.” Pervin,L.A.(Ed.) *Goal concepts in personality and social psychology*. Hillsdale,NJ:Lawrence Erlbaum.,127-167
- Cantor,N.,Norem,J.,Langston,C.,Zirkel,S.,Fleeson,W., & Cook-Flannagan,C. 1991 “Life tasks and daily life experience.” *Journal of Personality*,59,425-451
- Crittenden,K.S., & Wiley,M.G. 1980 “Causal attribution and behavioral response to failure.” *Social Psychology Quarterly*,43,353-358
- Elig,T.W., & Frieze,I.H. 1979 “Measuring causal attributions for success and failure.” *Journal of Personality and Social Psychology*,37,621-634
- Emmons,R.A. 1986 “Personal strivings:An approach to personality and subjective well-being.” *Journal of Personality and Social Psychology*,51,1058-1068

- Emmons,R.A. 1989 "The personal striving approach to personality." Pervin,L.A.(Ed.) *Goal concepts in personality and social psychology*. Hillsdale,NJ:Lawrence Erlbaum.,87-126
- Emmons,R.A. 1991 "Personal strivings,daily life events,and psychological and physical well-being." *Journal of Personality*,59,453-472
- Folkes,V.S. 1982 "Communicating the reasons for social rejection." *Journal of Experimental Social Psychology*,18,235-252
- 速水敏彦 1995 「外発と内発の間に位置する達成動機づけ」 『心理学評論』,38,171-193
- 速水敏彦・長谷川孝 1979 「学業成績の因果帰着」 『教育心理学研究』,27,197-205
- 平川淳子 1999a 「大学生の努力動機が帰属様式に与える影響-努力帰属の意味」 『日本心理学会第63回大会発表論文集』,54
- 平川淳子 1999b 「大学生の努力動機とその類型化の試み」 『日本教育心理学会第41回総会発表論文集』,695
- 平川淳子 2000 「達成動機理論に基づく努力観と帰属様式の検討-個人にとっての意味を捉える試み」 『大阪大学大学院人間科学研究科修士論文』(未公開)
- 広瀬幸雄・石井徹・木村昌幸・北田隆 1982 「達成動機と原因帰属がパフォーマンスに及ぼす効果-Weinerのモデルの実験的検討」 『実験社会心理学研究』,22,27-36
- Hoge,D.R., & McCarthy,J.D. 1984 "Influence of individual and group identity salience in the global self-esteem of youth." *Journal of Personality and Social Psychology*,47,403-414.
- 稲本哲郎 1978 「Weinerの達成動機づけ理論について」 『心理学評論』,21,110-126
- 北山忍・高木浩人・松本寿弥 1995 「成功と失敗の帰因-日本的自己の文化心理学」 『心理学評論』,38,247-280
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 「Locus of Control尺度の作成と、信頼性・妥当性の検討」 『教育心理学研究』,30,38-43
- Kingdon,J.W. 1967 "Politician's beliefs about voters." *American Political Science Review*,61,137-145
- Krahe,B. 1992 *Personality and social psychology:Toward a synthesis*. Sage Publication. (堀毛一也(監訳) 1996 『社会的状況とパーソナリティ』 北大路書房)
- Kuhn,M.H., & McPartland,T.S. 1954 "An empirical investigation of self-attitudes." *American Sociological Review*,19,68-76.
- Lau,R.R., & Russel,D. 1980 "Attribution in the sports pages:A field test of some current hypotheses in attribution research." *Journal of Personality and Social Psychology*,39,29-38
- Lecci,L.,Karoly,P.,Briggs,C., & Kuhn,K. 1994 "Specificity and generality of motivational components in depression:A personal projects analysis." *Journal of Abnormal Psychology*,103,404-408
- Little,B.R. 1983 "Personal projects:A rationale and method for investigation." *Environment and Behavior*, 15,273-309
- Little,B.R. 1989 "Personal projects analysis:Trivial pursuits,magnificent obsessions,and the search for coherence." Buss,D.M. & Cantor,N.(Eds.) *Personality psychology : Recent trends and emerging directions*. New York:Springer-Verlag,15-31
- Little,B.R.,Lecci,L., & Watkinson,B. 1992 "Personality and personal projects:Linking big five and PAC units of analysis." *Journal of Personality*,60,501-525
- Marsh,H.W. 1986 "Global self-esteem : its relation to specific facets of self-concept and their importance." *Journal of Personality and Social Psychology*,51,1224-1236.
- McGuire,W.J., & McGuire,C.V. 1980 "Salience of handedness in the spontaneous self-concept." *Perceptual and Motor Skills*,50,3-7.
- McGuire,W.J., & Padawer-Singer,A. 1976 "Trait salience in the spontaneous self-concept." *Journal of Personality and Social Psychology*,33,743-754.
- 宮本美沙子(編) 1979 『達成動機の心理学』 金子書房

- 中村薫 1986 「孤独感の原因帰属に関する研究~自己の場合と他者の場合」 『心理学研究』,57,141-148
- 奈須正裕 1988 「Weinerの達成動機づけに関する帰属理論についての研究」 『教育心理学研究』,37,84-95
- 奈須正裕 1990 「学業達成場面における原因帰属、感情、学習行動の関係」 『教育心理学研究』,38,17-25
- 奈須正裕 1995 「達成動機の理論その現状と統合的理解の枠組み」 宮本美沙子・奈須正裕(編) 『達成動機の理論と展開』 金子書房 1-10
- 大橋靖史・篠崎信之 1995 「将来のゴールに関する研究の検討」 『心理学評論』,38,214-246
- 尾崎仁美 1999 「青年の将来展望に関する研究 —個人における将来展望の重要性を考慮して—」 『人間科学研究』,1,187-198
- Riener,B.S. 1975 "Influence of causal beliefs on affect and expectancy." *Journal of Personality and Social Psychology*,31,1163-1167
- 杉浦健 1996 「クラスの学習目標の認知が原因帰属と期待・無気力感に及ぼす影響について」 『教育心理学研究』,44,269-277
- 角野善司 1993 「個人的目標研究の動向」 『東京大学教育学部紀要』,33,117-124
- Weiner,B., & Sierad,J. 1975 "Misattribution for failure and enhancement of achievement strivings." *Journal of Personality and Social Psychology*,31,415-421
- Weiner,B. 1979 "A theory of motivation for some classroom experiences." *Journal of Educational Psychology*,71,3-25
- Weiner,B. 1983 "Some methodological pitfalls in attributional research." *Journal of Educational Psychology*,75,530-543
- Weiner,B.,Frieze,I.,Kukla,A.,Reed,L.,Rest,S., & Rosenbaum,R.M. 1971 "Perceiving the causes of success and failure." Jones,E.E.,Kanouse,D.E.,Kelley,H.H.,Nisbett,R.E.,Valins,S., & Weiner,B.(Eds.) *Attribution:Perceiving the causes of behavior*. New Jersey:General Learning Press. 95-120

A Study Concerning Methodology of Achievement Motivation

Junko HIRAKAWA

Hitomi OZAKI

Weiner's theory of achievement motivation based upon causal attribution has been applied to many fields of study. But a number of methodological problems in attributional research can be pointed out. The purpose of this paper is to discuss those problems and to suggest some new viewpoints.

First, we must study not only the differences among the individual attributional styles, but also the causes that are different in achievement situations. The distinctness of the situations such as "academic situations" and "sporting situations" must be compared. Also, we should consider if the achievement situation is important for the subjects and if they wish to achieve in the situations. For this purpose, an investigator should not provide specific situations. The method by which the subjects describe situations freely and assess importance of each situation is useful. Finally, how to categorize situations is also important. It is not sufficient to compare attribution styles based only on objective categorization such as "academic situations" and "sporting situations." The research using subjective categorization is necessary. Subjective categorization is a method of categorizing situations based on how the situation is perceived by the subjects and this can be done by evaluating some attributes of goals. This method is often seen in the studies on personal goals.

The above study method can be seen as an integration of the researches that we see in preceding achievement motivation study. Using this method, we can study the achievement process both on the ideographic and nomothetic view.